

戦女神×魔導巧殻 外伝  
～ディアンのリア充  
生活～

Hermes\_0724

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本編：戦女神×魔導巧殻 第三期 新たな理想郷へ も是非！

エディカーヌ王国に拠点を移したディアンは、使徒たちと共に新たな生活を始めた。これまでの西ケレース地方とは気候や土壌が異なる中で、試行錯誤を続ける。ディージェネル地方やリプリール山脈、南方諸国など、これまでとは違う「食材」を使つて新たな料理を生み出していく……

「永遠の生命は、生きていけるといふ感覚を胡乱にしてしまう。オレは人間として生きる」  
無限の寿命を持ちながらも、生きていけるといふ充実感を得るために、ディアンは今日も奮闘するのであった……

第二期で外伝を書いていたときに結構面白かったので、不定期更新のシリーズにしてみました。本編の流れには影響のない範囲で、デイアンの日々の生活などを描きたいと思っています。基本は「料理×冒険×ナイトライフ」でしょうかね。

遊びですので不定期更新です。文字数もそれほど多くありませんし、読まなくても問題ありません。楽しんでいただければ嬉しいです。

# 目次

- 第一話：デイジエネール地方西岸にて 1
- 第二話：メヘル盆地の恵み —— 9
- 第三話：シャルミラ行商隊（前編） 15
- 28 第四話：シャルミラ行商隊（後編）

## 第一話：ディージェネール地方西岸にて

ディージェネール地方の広大な森を西に抜けると、白い海岸線がある。岩山と森に囲まれた砂浜にディアンたちはいた。生えている大きな椰子の木に丈夫な麻縄を編んで作ったハンモックの上で読書をする。遠浅の海では、三人の美女が燥いでいる。使徒でありエディーカーヌ王国女王であるソフィアは、週に二日の休みを必ず取るようにしている。それに合わせてディアンと三人の使徒は、熱帯の砂浜に休暇に来ていた。西方諸国では露出の少ない水着が主流だが、三人は上下を隠すだけの大胆な水着を着ている。ディアンが絹織物の職人に注文した水着だ。最初は恥ずかしがっていた三人だが、やがてその開放感に慣れたようである。ディアンも上半身は裸で、黒で染めた七分丈の下穿きを履いているだけであつた。大型の日傘を砂浜に刺して陰をつくり、木綿布を敷いて三人が横たわる。

『ディアンツ！オイル塗って〜』

レイナの甘えた声に誘われ、ディアンも日傘に向かった。オリーブ油と堅果油ナッツを混ぜて作った日焼け止めの油を三人に塗る。永遠の若さを持つ三人にシミなど出来るはずもないが、ソフィアなどは人目もあるため、日焼けをするわけにはいかない。三人は気

持ちよさそうにしながら、サトウキビの蒸留酒と柑橘果汁で作ったカクテルを飲んでいく。白く美しい裸体が光を反射し、思わず獣欲がこみ上げる。ディアンは切り替えるように夕食の話をした。

『鬼族から魚介類を仕入れていっている。今夜はここで野外料理をしよう。オレが料理をする。お前たちは遊んでいていいぞ』

『じゃあ、お言葉に甘えて…』

オイルを塗り終わった三人は、再び海に向かった。ディアンは笑いながら食事の支度に向かった。

大型の焔炉の様子を見る。薪を焚べ、海獣の塊肉を燻焼にしている。低温で焼くため、時間が掛かる。その間に椰子の木で立てた平屋の家に向かう。海が近いため井戸を掘ると塩水が出てしまう。そこで、この別荘には小川から真水を引いている。別荘と言っても、それなりの広さがある。四人が一緒に寝るための寝台が置かれた主寝室が一つ、対面型の厨房とダイニング、ディアンの書斎のみである。風呂は無いが、屋外に真水を浴びるためのシャワーがある。窓はそれなりに大きく取っているが、蟲や小動物が入ることはない。窓や出入り口の四隅に境界印が描かれており、建物全体も境界で覆わ

れている。新開発された「蓄魔焰」によつて、魔力を補充するだけで半永久的に結界が維持できるようになった。天井扇を回す動力にもなっている。木桶に水を汲み、四人分にしては少し大きめの鉄鍋を持って再び外に出る。

『塩の確保は喫緊の課題だな。オレたちが使う分なら此処で確保できるが、国全体の必要量を確保するとなれば、ニース地方を吸収して「塩の道」を確保するしか無いだろう』

考え事をしながらも、手は勝手に動く。今朝揚がったばかりの新鮮な烏賊を取り出す。まだ生きた状態だ。海水で洗い、胴体に指を入れて内臓ごと脚を取り外す。小刀で軟骨を取り外し、皮をむく。内臓と墨袋は水系魔術で凍らせて密閉箱に入れる。持ち帰つて別の料理に使うためだ。内部まで綺麗に洗い、ゲソも塩揉みをして汚れを落とす。胴体は輪切りにする。野菜類は赤茄子の果肉、玉葱、人参、芹、大蒜を微塵切りにし、茸も適当な大きさに切り分ける。平鍋を炭火に掛け、オリーブ油と輪切りにした烏賊を入れる。焦げ目が適度につくまで焼き、微塵切りにした野菜類、茸、赤茄子の果肉を入れる。水気を飛ばしたところで砂抜きをした貝類、頭の付いた海老、白身魚の切り身、水、塩、サフランを入れ、ひと煮立ちをさせる。魚介を取り出し、残ったスープに生米を入れる。蓋をせずにクツクツと炊く。火加減を見ていると、三人の美女がやってきた。シャワーを一浴びしたらしい。

『いい匂い。パエリアだね?』

『海獣の肉もそろそろ良きそうだな』

『空腹でお腹と背中がくつつきそうです』

三人が椅子に腰掛ける。ディアンは仕上げに取り掛かった。魚介を戻し、火力を強くする。鍋を火から下ろし、くし切りにしたライムと香味野菜の葉を盛り付け、三人が待つ食卓に鍋ごと運ぶ。大型焔炉で焼いた海獣肉も出来上がっていた。塊をまな板に載せ、それも食卓に運んだ。三人の前で肉を薄切りにし、ハチミツや赤茄子、香辛料で作ったソースを掛ける。水で冷やした人参、胡瓜、芹を縦に切り、器に刺す。アボカド、玉葱、アリオリを混ぜたソースを器に入れる。

『さて、待たせたな。今夜の料理は新鮮魚介のパエリアと海獣肉のロースト、野菜のアボカドディップ添えだ。麦酒も冷えているぞ』

氷水で冷やしておいた緑色の硝子瓶を並べる。コルク栓を外し、皆が一本ずつ持った。

『では、ソフィアの誕生日を祝して…』

西に沈む綺麗な夕焼けの中で、カチャンと音が鳴った。

夜半、ディアンは寝台から起きた。日付は既に変わっている。二度つづ精を放たれ、



数え切れないほどに絶頂を得た三人の美女は、全裸のまま幸せそうに眠っている。赤道に近いが海辺のため、夜は比較的過ごしやすい。三人に薄布を掛けてやり、ディアンは外に出た。蒼い月明かりを反射して白波が足元に打ち寄せる。満天の星空と月明かり以外には、一切の灯りはない。砂浜のデッキチェアに腰掛け、漫然と水平線を眺める。転生前からこれまでの人生を振り返る。歎びや哀しみが入り交じる。苦難、悲哀、安楽、歓喜……転生前も転生後も、決して平坦ではなかった。怒りに我を忘れたこともあった。別れに涙したこともあった。それら全てが、人生という唯一無二の料理に欠かせない「調味料」なのだろう。塩だけ、砂糖だけの料理など味気ないものだ。

『「リア充」なんて、簡単だ。何かを追い求めれば、それだけで手に入る……』

『「リア充」って何?』

独り言を聞かれたのか、後ろから声が掛けられた。金色の髪が月明かりを反射し、眩く輝く。第一使徒はディアンの上に跨った。下半身を隠す布だけ巻いている。

『まあ、簡単に言えば「充実した人生」ってことさ。何を持って充実とするかは、人それぞれだ』

『あなたの定義は何?』

『オレか? そうだな…… オレは人間だ。人間の欲望は飽くことが無い。だが自分独りのために生きていれば、いつかは行き止まりに達する。オレは、オレの大事な人たちに幸

福になって欲しい。生まれ変わっても、またオレの使徒になりたい… お前には、そう  
思える生涯を送って欲しい。そのために生きる。そのために時を費やす。それがオレ  
の「充実」だな』

『じゃあ、私を幸せにして…』

デイアンの下半身が熱いもので包まれた。

翌朝、まだ薄暗い中でデイアンは朝食の準備を始めた。アボカドの実を半分に取り、  
種を取り除く。中身をくり抜き、適当な大きさにスライスする。適当な大きさの土鍋  
に、薄切りにした塩漬けの海獣肉、タロイモ、アボカドを入れてオリーブ油を回しかけ、  
蓋をする。別の料理を始める。デイジエネール地方で栽培されている芋から作られた  
「タピオカパール」を使う。昨夜のうちに水に漬けていたため、茹で時間はそれほど必要  
ない。椰子乳に賽の目に切った複数の果実、茹で戻して冷水に晒したタピオカを入れ  
る。使徒たちが伸びをしながら出てきた。全員が下半身を布で隠しているだけである。  
デイアンは頷いて三人と共に日課の体操を始めた。

『料理は出来たてが旨いからな。もう少し待っていてくれ…』

基礎魔力鍛錬の後、デイアンは仕上げに掛かった。土鍋の蓋を外して海鳥の卵を割り

落とし、乾酪<sup>チーズ</sup>を削って掛ける。再び蓋を戻し、炭火に置く。火加減を調整し、卵が半熟の状態になるように調整する。余計な調味料入れない。塩漬け肉からの塩味だけである。オリーブ油を除けば、全てこのディージェネール地方で採れた食材である。美女たちが目を細めて味わっているのを見て、ディアンも満足した。

『海と料理だけなのに、なんだかとっても贅沢に感じるわね』

『これが毎日であれば退屈かもしれないが、忙しい日々の中でこうした時間を持てば、贅沢に感じるのだろうな』

『良い気分転換になりました。明日から再び王宮での執務と思うと、少しだけ後ろ髪を引かれます』

『ターペⅡエトフでは一週間のうち三日は休みであったが、年に二月ほど、連休日を設けていたな。祭りと合わせることで国内での民の移動が活発になり、相互理解の促進にも繋がっていた。エディカーヌ王国でも、そうした「暦の調整」はあっても良いと思う。毎月では困るが、年に二、三は、そうした連休があっても良いのではないか?』

普段は生真面目で、過剰労働気味のソフィアも、その意見に賛成したようだ。食後は掃除を始める。使った鍋は綺麗に洗い、炭火なども後片付けをする。箒で室内を掃き清め、使用した炭から灰汁を作り、寝台の布などを洗う。石鹼を使えば楽だが、ここはディージェネール地方である。その地の文化に合わせるべきだろう。水系魔術を使って水分

を半分ほど蒸発させ、天日に干す。昼前には、全ての片付けが終わる。洗濯物は綺麗に畳んで収める。別荘の戸締まりをし、守護結界を張る。最後に、砂浜に地脈魔術を走らせて綺麗に整える。この地は汚れてはならない。無垢のままでなければならぬ。それがエディカーヌ王国の基本方針である。森の中にある小屋に入る。四人まで同時転送が可能な「新型転送機」が設置されている。

『行こうか。サーヤとレオンも明日、帰ってくる予定だ』

『楽しかったわ。また、遊びに来ましよう』

四人は笑顔のまま、転送機に乗った…

## 第二話：メヘル盆地の恵み

デイル・リフイーナ世界においては、薬品類などの化学においてはそれ程進んではない。その大きな理由としては、文明が進んでいる西方諸国においては光神殿の影響が強く、「旧世界の科学」は忌避される傾向があつたためである。そのため、石鹼や整髪剤、女性の化粧品類においてはそれ程進んでおらず、化粧をするのは一部の特権階級層の貴婦人に限られていた。一般庶民では、女性であつても何日も風呂に入ることが無く、濡れた布で拭くのがせいぜいであつた。脛や脇の毛の処理もしていないため、中には「ケジラミ」などが湧き、性病の原因になる場合もあつた。国家形世紀以降、主要都市には「公衆浴場」が設けられ、衛生環境も改善していったが、成熟国家が各地にあつた新七古神戦争時代においても、女性の美容という点においては、旧世界イアス・ステリナには遠く及んでいない。

ソフィア・ノア・エディカーヌは、心地よさに恍惚の表情を浮かべて瞳を閉じた。普段は女王として多忙な毎日過ごし、神経を使っている彼女にとって、週に一度のこの

時間は至福である。自宅の風呂場にある石台に分厚い羊毛布を敷いてうつ伏せ横たわる。男の手が背中に伸びてきた。ホホバ油にラベンダーの精油を混ぜた「マツサージ・オイル」を塗り、背骨から肩、脚までを丹念に揉み解す。脇腹などには無駄な肉は一切無い。自分の使徒の美しさに、男は満足していた。掌に雷系魔術を込める。背中や脚にチリチリとした痺れが走る。

『ソフィアは元々が薄毛だからな。脱毛処理も対して痛みは無いだろう?』

『ディアンの問いかけに、気怠く返事をする。もう数百年前から受けている処理だ。腕、脇、下半身、脚には毛など殆ど無い。使徒になった当初は、はじめはこうした処理に戸惑っていた。数百年の時の中で、そうしたムダ毛は完全に抜け落ちている。今受けている処理も、毛の処理というよりは筋肉を解すためのものに近い。足の裏を揉まれる。最初に受けた時は激痛で泣きそうだったが、いまでは痛みは微かにある程度で、むしろ心地よかった。』

『使徒といっても、代謝活動が永遠に衰えないというだけで、肉体は人間だからな。神族の肉体と比べれば、血行や気の滞りも起きやすい。痛みはあるか?』

『ありません… 気持ちいい…』

足の指を一本ずつ解す。首筋、肩、背中、脚まで時間を掛けて丹念に揉まれ、ようやくソフィアは仰向けになった。男なら誰もが欲情するであろう美しい裸体だが、ディア

ンの表情は真面目そのものだ。使徒オンナの美貌を保つのは、主人オトコの義務と考えている。腕型の程よい大きさの乳房や、三本の縦線が入った腹部を丹念に揉み、太腿から内股も解していく。ラベンダーの香りを吸い込み、ソフィアは溜息をついた。油で光る白い裸体に木綿布を掛ける。

『よし、次は顔だ。新しい香油を使おう』

濡らした厚手の木綿布を固く絞って、水系魔術で一瞬で熱くする。程よい温度に調整して顔に掛ける。その間にオイルの準備をする。ホホバ油に数滴を垂らす。仄かに甘く、バラとミントの香りが立つ。ゼラニウムの香油だ。蒸し終えた顔を解していく。首筋、頬を中指と薬指で持ち上げるように揉む。目元、額、コメカミまでを解す。その後ヨーグルトに「醐」と小麦粉を混ぜたものを顔に広げ、綺麗に洗い流す。続いて頭部に取り掛かる。ココナツツミルク、生蜂蜜、ホホバ油、ローズマリーの精油を混ぜ、絹のような黒髪に馴染ませる。頭部を指で揉む。腰まである長い黒髪に櫛を通し、漉いていく。ぬるま湯で洗い流した後に、数種類のハーブを煮出した水に葡萄酢とイランイランの香油を混ぜ、髪に馴染ませる。最後に全身を洗い流して終わる。二刻以上を掛けて、ソフィアの全身が磨き上げられた。自分の前に立つ黒髪の美女に、ディアンはようやく獣欲を覚えた。

『…仕上げをして下さい』

瞳を潤ませ、ソフィアが誘ってくる。二人は湯船に浸かり、向き合うように繋がった。一週間ぶりに満たされ、ソフィアは背中を仰け反らせた。

ディアン・ケヒトは、とにかく食事にこだわっている。安い食材でも手間を掛けることで驚くほどの料理に仕上がる。無論、ただ旨いものを食べたいという理由だけではない。魔神である自分は、神核が生み出す魔力によって肉体が維持され、何も食べずとも生きていける。だが使徒たちは人間である。食べることで栄養素を取り込み、肉体を維持する。二十歳前で老化が止まり、高い代謝機能を維持し続けているとは言え、栄養素が偏れば影響が出る。全ての栄養素を満遍なく取り込むには、それなりの料理が必要であつた。

『今夜の料理は「ナマズの唐揚げ タルタルソース添」ミトマト「小赤茄子と葉野菜、コリアンダーのサラダ」トリコ「松露の冷製スープ」だ』

そう言うのと、ディアンは準備に取り掛かつた。清水を引いた生簀に三日間入れて泥抜きをしたナマズを捌く。包丁の背で頭を叩いて気絶させ、錐でまな板に固定する。胸ビレから包丁を入れて骨に沿って割く。頭と骨、内臓と卵を取り除く。卵は湯通しして醤油や生姜と煮ると酒のツマミになる。腹骨を鋤いて皮引きをする。適当な大きさに切



り、塩を振って暫く置く。その間にタルタルを作る。固茹でした卵、玉葱、酢漬けにした胡瓜、オリーブの実を刻む。卵黄、葡萄酒、オリーブ油で作ったアリオリに加えれば、タルタルソースの完成である。続いて冷製スープを用意する。玉葱と茸を微塵切りにし、乳酪<sup>バター</sup>で炒める。白葡萄酒、オリーブ油、鶏ガラなどで取った出汁を加えて煮る。炭火から鍋を降ろし牛乳、刻んだ松露を加え、塩と胡椒で味を整える。水系魔術を使って鍋を冷ます。冷やした一人用の器にスープを注ぎ、薄切りにした松露を乗せれば完成である。二人の弟子は木の器に野菜を盛り付けている。冷水に晒した野菜を姉が切り、弟が盛る。ドレッシングはオリーブ油と葡萄酒、塩、胡椒で作る。

『お姉ちゃん、この「胡椒」って初めてみたよ・・・』

『村では塩を振った獣の肉と野菜の丸齧り程度だったから、とても驚きだわ。料理って、こんなに幅があるのね』

太陽の民であった二人は外の食材を知らない。「発酵食」は酒ぐらいしか無かったのである。ディアンは仕上げに取り掛かった。ナマズに胡椒を振り、小麦粉を付けて低温のオリーブ油で揚げる。一度引き揚げ、高温にして再び揚げることで、外はカリツとし中はふつくらとする。更に盛り付け、麵麩を添えた。

『よし、完成だ。サーヤもレオンも、手伝ってくれてありがとう』

二人は笑顔で、料理を食卓に運んだ。

『攪拌機ミキサですか？』

食事中、ディアンが話題にした「ある道具」に、使徒三人も弟子たちも首を傾げた。干した盃を手を持って説明する。

『この盃の底にS字型の薄刃を固定し、高速で水平回転をさせる。すると、盃に入っていた野菜などは粉々に切り刻まれ、汁と混合される。このスープの味を更に上げるには、こうした「魔導道具」が必要になる』

『十分に美味しいと思うけど？』

レイナの疑問にディアンは首を振った。

『料理は、文化であり芸術だ。より美味しくする方法があるのなら、それを追求すべきだろう。薄刃だけを回転させる術式、起動と停止の制御機能などが必要だな。今度、サーヤとレオンを連れてレミに行く予定だ。その時、ドワーフたちに相談をしてみよう』

『完成したとしても、使える人が少ない以上、殆ど売れなそうですね。ディアン一人が使う「趣味の道具」になりそうです。国王としては、あまり公私混同をして欲しくないのですが？』

ディアンは肩を竦め、皆が笑った。

## 第三話：シャルミラ行商隊（前編）

後世、エディカーヌ帝国には東と西を結ぶ基幹道が二本、走ることになる。東方諸国から西に走る大陸航路は大草原地帯の手前で南北に分かれる。北の大陸航路はグプタ部族国を通り更に二本に分かれ、一本はアヴァタール地方に向かい、もう一本はレスペレント地方を通る。一方、南に向かった大陸公路は香辛料の生産地であるタミル地方を通り、ニース地方を経てエディカーヌ帝国を北上、ブレニア内海南岸を西に進み、ベリア王国を経てマーズテリア神殿領、神聖フェルス帝国などを通る。エディカーヌ帝国（王国）が誕生する前までは、ニース地方北部は完全な人口希薄地帯であり、リプリール山脈の麓に鉱山の村「レミ」がある程度であった。ニース地方で生きる住民の大半は、南部の沿岸地帯に集中していたのである。

エディカーヌ王国のリプリール山脈開発が、この状況を一変させる。女王ソフィア・ノアⅡエディカーヌは竜族やリスルナ王国と交渉、リプリール山脈を横断する「山越えの道」を整備し、山脈を超えて東西を繋げることに成功した。これにより、山脈東部の鉱山から生まれる希少な鉱物資源を西部の王国各都市で利用することが可能となり、ただの集落であったレミは鉱山都市として飛躍的な発展を遂げることになるのであ

る。またこの道が出来たことにより、ニース地方北部の発展が進み、それまで未開の地と言われていたニース地方以東の広大な大地が、エディカーヌ王国に開放されることになる。エディカーヌ王国は侵略を目的とする戦争を忌避していたが、その強大な経済力はニース地方の住民、特に野心あふれる若者たちを引きつけ、やがて集落単位でのエディカーヌ王国合流運動へと繋がったのである。

鉦山都市レミは、後世においては帝国屈指の大都市となるが、建国当初はドワーフ族を中心とした「鉦山の街」であり、人口も一万人を超える程度であった。それでも、街には上下水道が整備され食料も豊富にあり、経済的に豊かな街であった。突如として出現した「金持ち」は、ニース地方の閉鎖的な経済空間に大きな風穴を開け、野心ある若者たちはレミを目指し、さらには山を超えてエディカーヌ王国首都スケーマで店を持つことに憧れた。この日も、そうした夢溢れる若者が率いる行商隊が、レミに到着していた。

『よーし、みんな！明日はレミの街見学、明後日はいよいよ、リプリール山脈超えをするよ！今日はゆっくり休みな！』

若い赤毛の女が元気な声で指示を出す。背丈は六尺近くあり、女性ではかなり背が高

いほうだ。その隣で、帳面を開く女性がいた。同じ赤毛だがこちらは五尺五寸程度である。

『お姉ちゃん。そろそろ日が暮れるから、先に予約に行こうよ』

『そうだね。みんな、アタイはカウラと一緒に山道通行の許可を貰いに行く。荷物おろし頼んだよ！』

タミル地方の集落出身の行商人シャルミラは、妹のカウラと共にエディカーヌ王国を目指していた。タミル地方は幾つかの都市が点在しており、それぞれに縄張り争いなどを続けている。そのため治安も良いとはいえない。シャルミラの両親も突如として襲ってきた山賊たちに殺された。妹を連れて辛うじて逃げたシャルミラは両親の僅かな蓄えを元手に行商を始めた。最初は小規模であったが、シャルミラの交渉力とアウラの天性の計算力により、行商隊は順調に大きくなっていった。だが閉鎖的な経済空間では、行商にも限界があった。さらなる成長を求めて、シャルミラ行商隊は新興国を目指したのである。

『では明後日の朝に北側の門を出てください。この規模であれば恐らく二日目のお昼には、峠に到着するでしょう。峠には宿がありますが、ご宿泊はされますか？』

『そうだね。アタイと妹、そして男四人の合計六人で泊まるよ』

『相部屋ドミトリと二人部屋がありますが、どうされますか？』

『男どもは相部屋、アタイと妹は二人部屋でお願い。あと朝飯も食べるから、それも付け加えておいて』

『わかりました。では宿に伝えておきます』

リプリール山脈は魔獣も多く棲む山である。縄張りに入らないように山道は敷かれてはいるが、危険が全く無いわけではない。そのため万一のために山道に入る北門では、山越えを希望する行商隊や旅行者、冒険者などを受け付ける「入山受付所」がある。この受付で山の尾根にあるという「峠の宿」を予約することもできる。大抵の行商隊は、その宿で一泊をしている。その日の受付を全て終えると、男は紙を筒状に丸めて鳩の足に括り付けた金属の筒に入れ、解き放つ。鳩は山の尾根を目指して飛び立った。

『わっ…お姉ちゃん、アレ見て』

受付所を出た時、カウラが声を漏らした。異様な光景であった。七尺以上はあるうかという大きな魔物が荷車を牽いているのだ。全身が石で出来ている「ストーン・ゴレム」である。三体のゴレムがそれぞれ荷車を牽き、黒い外套を羽織った黒髪の男がその横を歩いていて、荷車には、栗色の髪をした少女と少年が乗っていた。どうやらレミで仕入れをしていたようで、革の幌が山を描いている。普通であれば魔物が出たとなれば大騒ぎになるはずだが、どうやら慣れているらしく、住民たちは気にしていないようだ。

『魔物に荷車を牽かせるなんて。それにもう日が沈む。こんな時間に山に入るの？何を考えているのかしら…』

姉妹は首を傾げて荷車の一行を見送った。

レミの中でも人気の酒場でシャルミラ行商隊は前祝いをしていた。三日後には王都スケーマに到着する。タミル地方の香辛料やニース地方南部産の「塩」程度は他の行商人でも運んでいるが、シャルミラ行商隊はそれとは別のものを運んでいた。これが成功すれば、大儲けの機会を得られるかもしれない。ドワーフ族の女性が陶器製の大きなジョッキを持ってきた。泡立つエール麦酒を呷る。

『かあっ！美味しい！人気店っていうだけあって、酒一つとっても他とは違うわね。アタイたちが飲んでいた黒穀酒や蜂蜜酒なんて比較にならないわ。店主！おかわり！』

『お姉ちゃん。明日は朝早いんだから、程々にね？』

仔牛の骨付き肉や揚げた芋、冷水で冷やした赤茄子を薄切りにして乾酪チーズを振りかけた料理などが出される。宴もたけなわの頃、店前がガヤガヤとしはじめ、やがて三十路前ほどの女性が男を引き連れて入ってきた。

『みんな！元気にしてる!？』

おお！という声が店中に響く。どうやら女性はこのレミでは有名人のようだ。女性が手を挙げると、男どもが木箱を運び込んできた。

『ニツシツシツ！ディアンがやつと「蒸留酒」を瓶詰めしてくれたよお！五十本、木箱三箱分を持ってきたよお〜』

『こりや助かる！全部、ウチで買うぜ。おう、お前ら！店からの奢りだ。一杯ずつ飲め！』

小さな盃が配られる。ニヒヒと笑いながら、女性は皆に酒を注いでいった。誰それが結婚したのだの、子供が生まれたのだの、近況の聞いている祝いの声を掛けている。

『あら、アンタたちは行商人みたいね？アタシはリタ。アヴァタール地方からきた行商人だよ。よろしくね？』

『あ、え、ええ…よろしく…』

その場の空気というか勢いというか、なみなみと注がれた琥珀色の液体をシャルミラたちは眺めた。見たことのない酒である。強い酒精の香りがした。

『さ、ぐぐーっといっちゃいな。一気にね』

シャルミラは頷くと、一気に呷った。凄まじい強さに思わず咽る。

『ぐはっ…っ、強い！なにこれ？』

『「蒸留」っていう技術を使って、麦酒を更に強くして、それを木樽に詰めて数年寝かせ



るところなるそうだよ。どう?』

『い、いや… かなり強くて…』

『でも姉さん。少しずつ飲むと、結構イケますぜ?』

男たちはシャルミラの様子から、チビチビと飲み始めた。リタはシャルミラの盃に蒸留酒を注ぎ、肩を叩いて去っていった。怖ず怖ずと飲みながら、シャルミラは何となしに店主と話をしているリタを眺め、呟いた。

『あのリタって商人、相当な遣り手だね。この店を完全におさえてる。つまりレミの街はあの商人が顔役ってわけか。どれ、ちよつと行つてくるわ』

そう言うのと立ち上がり、リタに話しかけた。

『リタさん。アタイはシャルミラ。ニース地方の行商人よ。ちよつと相談があるの。いい?』

『ん? まだ飲みたいの? 三杯目はお金払うんだよ?』

『いえ、そうじゃなくて… アタイらは明日、スケーマの街を目指すんだけど、スケーマで会っておいたほうが良い人っているかな?』

リタはシャルミラを見つめ、そしてその背後に座っている行商隊のテーブルを見た。ふーんと頷き、考える。

『まあ教えても良いんだけど、その前に確認。アンタ、どうして行商人やってるの?』

『え?』

『行商人は、必要としている場所にモノを運び、対価として利益を得ている。成功すれば貴族顔負けの屋敷だつて手に入る。綺麗な服に身を包んで、社交界にだつて呼ばれるかもしれない… そうした生活に憧れてるの?』

『そ、そりゃあお金は欲しいよ。アタイも妹も、両親を亡くして苦労して生きてきたんだ。その日の食事に困つたことだつて一度や二度じゃないんだ。そんな思い、もう妹にはさせたくない』

『うん。だつたらさっさと結婚して、家庭に収まればいい。スケーマには若い男も大勢いる。アンタなら引く手数多だよ』

『…何が言いたいわけ?』

シャルミラが表情を険しくする。リタは逆に笑顔になった。

『アタシが言いたいののはね。行商人をやるのも、富を得るのも「手段」に過ぎないってことだよ。カネはね。使つてこそ価値があるんだよ。商人で成功したとして、その富を何に使うの? 自分の幸福のためだけに使うのなら、大金なんて必要ないよ。人の百倍稼いでいるからといって、食事が百倍になるわけじゃないでしょ?』

シャルミラは困惑した。これまでは生きることに関心一杯であつた。商人として成功した後なんて、考えたこともなかつた。こうした酒場で仲間たちと飲み、妹に食事をさ

せてあげられるようになったのも、最近のことなのである。

『アタシが言ったことは、まあ理想論だよ。でも覚えておいて損はないよ?』

リタは笑ってそう言うのと、真顔になった。シャルミラの耳元に顔を寄せる。

『これからアンタたちが行く峠の宿。その主と話をするといい。ただし、他言無用だよ。もし誰かに漏らしたら、アタシがアンタを潰すからね』

ポンと肩を叩き、リタは笑顔に戻った。シャルミラは一礼すると、その場を離れた。

翌朝、シャルミラ行商隊はレミの街の北側からリプリール山脈に入った。緩やかな傾斜の山道が続く。瓦礫などはなく、赤褐色の石畳が整然と敷き詰められ、荷車が普通に通ることができた。ところどころに水飲み場もあり、山越えとは思えないほどに快適に進む。第一日は野宿となるが、夕方には整備された広場に出たので、そこで野営の準備をした。広場の四方には金属製の筒が刺さっている。魔獣除けの結界であった。

『そういうえばレミで聞いたんだけど、ずーっと昔、この山に「魔神」が出たそうだよ?』

焚き火を囲んで皆で食事していると、カウラが魔神の話を出した。三百年以上前、危険地帯であったリプリール山脈の山越えに、幾つもの行商隊が挑んだ。その殆どが失敗し魔獣の餌となったが、ただ一隊だけ、山越えに成功した行商隊があった。山を降

りる時に魔神に襲われたが、一人の護衛が囷となり魔神を食い止めた。行商隊の名も男の名も残されていないため眉唾の話ではあるが、「お伽噺」としてレミで語り継がれていた。カウラの話を聞いて、男たちが苦笑した。

『カウラさん。そりゃ出任せだぜ。魔神と闘える人間なんて居やしねえよ。マーズテリアの聖騎士様だつて無理なんじゃねえか?』

『そうそう。吟遊詩人とかが創つた話だろうさ』

笑われて頬を膨らませたカウラの頭を撫でながら、シャルミラは昨晚の行商人を思い出していた。只者では無いことは間違いなかった。もつと色々話を聞きたいと思つたが、忙しそうだったので遠慮したのである。

(もしまた出会えたら、酒のお返しをしようか…)

遠くに魔獣の遠吠えが聞こえた。夜の帳が降りてきたため、交代で見張りを立てて、シャルミラ行商隊は眠りについた。

二日目も順調に山道を進む。陽が傾き始めた頃、リプリール山脈の尾根が見えてきた。夕刻前には宿場に着くだろう。やがて尾根にたどり着いたシャルミラたちは目を疑った。そこはとて、魔獣が出る山とは思えなかった。かなり広い広場があった。大

理石のように硬い地面は綺麗に掃き清められ、石造りのゴーレム三体が、掌を上に向けて広場の端に立っている。中央には噴水があり、鳥が水浴びをしていた。そして山の斜面を背に、木と石でできた大きな建物があった。右側は白い漆喰が塗られた三階建ての建物で、左側は黒い外壁の二階建てである。他の行商隊も来ているのか、二十両ほどの荷車が広場に並び、それぞれに革布が掛けられていた。

『ニャアア…』

足元を見ると、猫が自分の足に身体を擦り付けていた。屈んで抱こうとすると、手ですり抜けてゴーレムの方に駆け去っていく。ゴーレムの掌に何匹かの猫が見えた。石で出来た魔獣は微動だにせず、猫達の遊び場となっている。呆気にとられていたシャルミラたちに、栗色の髪をした可愛らしい男の子が駆け寄ってきた。

『こんにちわ！シャルミラ様の御一行ですね？ようこそ、峠の宿へ！ご案内します』

馬の手綱を子供が握る。シャルミラは慌てて、男たちに指示を出した。荷車を止めるのと、次は馬の世話である。厩舎もしっかりと用意されており、獣人の男が飼葉を与えていた。

『ゴンドさん。シャルミラ様の馬たちです。お世話の方、宜しく願います』

ゴンドという獣人は無口なのか、手を挙げて合図をしただけであった。

白い建物に向かう。入り口には「峠の宿」という看板が掛かっていた。シャルミラは気を引き締めた。リタから、ここの主と話をしろと言われていたからだ。子供が扉を開けた。カランという音とともに中に入ると、一人の女性が立っていた。

『いらつしやいませ。ようこそ、峠の宿へ…』

美しい金髪と純白と緋色のドレスを着た貴婦人である。見た目は二十歳前だが、これまで見たことがない程の美貌であった。真つ白な肌は滑らかで、ホクロは一つも無い。豊かな胸を持つことは、服の上からでも解る。何より、色香がありながらもどこかに「凜」とした雰囲気があり、場所が場所なら「大貴族の令嬢」にも見えるだろう。四人の男たちは女主人の美貌に完全に参っているようだ。アウラですら、あまりの「場違いさ」に何も言えないでいた。シャルミラは咳払いをした。

『失礼： 男どもが主人殿の美しさに参っているようです。アタイはシャルミラ。レミの街で予約をした行商人です』

『私はレイナと申します。この宿を取り仕切っています。さ、お部屋にご案内します。本日は皆様の他にも、三組の行商人の方がお泊りです。後ほど、隣の酒亭に行かれると良いでしょう。行商人同士で話をすることもできますから…』

シャルミラは頷いた。行商人にとって、他の街の情報は貴重である。エディカーヌ王

国には、王都スケーマ以外にも大きな街が幾つかあると聞いていた。これからの商売のためにも、どこで何が売れるのかを知っておく必要があった。

『アンタら！レイナさんに荷物を持たせるな！自分の荷物は自分で持ちな！』  
男どもは背筋を伸ばすと荷物を持ち、シャルミラの後に続いた。

（後編に続く…）

## 第四話：シャルミラ行商隊（後編）

「峠の宿」の三階は二人部屋専用であつた。行商隊を率いる商人は、こうした個室を取るのが一般的だ。それなりの大金を持つてゐるため、相部屋など論外である。シャルミラは妹のアウラと共に、二人部屋に入った。部屋は想像以上に広い。寝台が二つ並び、外套を掛ける衣装棚や書き物をする机も置かれてゐる。驚いたことに、廁まで部屋にあつた。水洗式になつてゐるようで花の香りがする。アウラは興奮して部屋中をくまなく見ている。寝台に腰かけると木綿を詰めた敷布団と羽毛の掛布団であつた。

『驚いたね。こんな宿は初めてだよ。少し高いと思つていたけど、これなら納得だね』  
『お姉ちゃん。食事しに行こうよ！こんなに凄い宿なら、きつと食事も凄いよ！』

護衛役である男四人とも合流し、シャルミラは一階から渡り廊下を通つて隣の建物へと入つた。二階建ての黒い建物である。

『…「魔神亭」？』

入り口に掲げられた看板には店の名前とともに注意書きが扉に吊るされてゐた。

…・…・当店は、魔神が営む「大人の社交場」です。未成年者のご入店は、固くお断りを致します。なお店内での乱暴狼藉には、魔神の使徒による「怖いお仕置き」がある



のでお気をつけを・・・

姉妹は思わず顔を見合わせた。冗談を通り越して「いかががわしき」まで感じてしまう。

『お、お姉ちゃん。大丈夫だよね？娯館とかじゃないよね？この店…』

焼いた麵包パンや大蒜ニンニクの香りが漂っている。飯屋であることは確かだ。シャルミラは思  
い切つて扉を開いた。

『こりや驚いたぜ。こんな飯屋は初めてですよ』

席につくと男たちが店内を見回した。店内は三十席ほどで栗色の髪をした女の子が可愛らしい服を着て立っている。どこからか心地よい音色の曲が聞こえてくる。店の奥にある何かの機械が奏でているようだ。他の行商隊の護衛と思われる男たちが、既に食事をしていた。対面席カウンターでは、行商人らしき中年の男二人が、酒を飲みながら話し込んでいる。その向こう側に、皿を拭いている男がいた。見た目は二十代の黒髪の男だ。女の子が話しかけてきた。

『いらつしやいませ。シャルミラ様御一行ですね？ようこそ「魔神亭」へ。こちらが本日のメニューです』

羊皮紙数枚が革製の冊子に差し込まれている。そこには綺麗な色の絵が描かれてい

た。それぞれの料理らしい。「飲み物」の欄には「エール麦酒」「麦蒸留酒」「葡萄酒地酒」「米酒」とある。値段はレミの街と比べると一割ほど高いが、山道を運ぶ手間を考えれば、むしろ安いほうだろう。シャルミラはエール麦酒を人数分注文した。程なく、透明な硝子杯が運ばれてきた。琥珀色の液体が白く泡立っている。手に持つと驚いた。恐ろしく冷たいのである。それ以外に、頼んでもいないのに小鉢が六つ出てきた。

『これは無料の「付き出し」です。本日の付き出しは「鯉のエスカベツシユ」です』

『あ、ああ… ありがとう。料理はあとで注文するよ』

シャルミラは何とか返答した。皆で杯を持ち、乾杯する。口に入れるとよく冷えた麦酒の芳醇な味が広がった。山道を歩いて疲れた身体にとって、この一口は犯罪であった。全員が一気に飲み干してしまった。

『かああつ！美味えつ！こんな美味しい酒は初めてだぜ！姉さん、もう一杯頼んでいいですかい？』

言われるまでもなく、シャルミラは注文した。杯が取り替えられ、また冷えた麦酒が出てくる。付き出しを食べると、これも美味かった。泥抜きした鯉の切り身を油で揚げ、人参や玉葱などの野菜類とオリーブ油、葡萄酒で味付けたものだが、唐辛子が入っているため少し辛い。その辛さが麦酒の味を引き立てていた。たった一杯の麦酒と小鉢一つの料理で、完全に魅了されてしまった。もしこの店が街にあったら、自分は毎日

通うだろう。隣の席に料理が運ばれていた。木製の平たい丸皿に平焼き麺麴のようなものが載っている。少し焦げた乾酪<sup>チーズ</sup>の芳ばしい香りで、ようやく空腹感を思い出した。

『お待たせしました。「ピッツア・エディカーナ」でございます』

全員が空腹であることを伝え、店主のお任せで料理を注文すると、まるで図つたかのように料理が出されてくる。ザリガニの冷製スープ、茹でたホウレン草と半熟卵のサラダの後に、目当ての料理が運ばれてきた。小麦の薄生地の上に赤茄子<sup>トマト</sup>ベースのソースを塗り、薄切りにした玉葱<sup>ピーマン</sup>、バジル葉、乾燥腸詰肉<sup>ドライサラミ</sup>、水牛乳の乾酪<sup>チーズ</sup>を散らし、石窯で焼いたものである。中央から六等分されているので、それぞれが手に持ってさらに移した。溶けた乾酪が伸びるため、フォークで支えながらさらに移す。ピッツアと一緒に運ばれてきた赤い液体を小匙で振りかけた。酢の酸味とかなりの辛味が加わる。溶けた乾酪の甘みと赤茄子と野菜の味を生地が受け止め、塩味と油が口いっぱい広がる。赤い液体の酸味と辛味がそれを引き締める。そこに冷えた麦酒を流し込む。満足感に、全員が溜息を漏らす。タミル地方の料理は香辛料で風味を出していた。だがこの料理は、香辛料以外にも様々な味を組み合わせて旨味を出している。一品一品が、衝撃的な味であった。

『三品をお出ししましたが、まだお腹に余裕があれば、あとにはメニューからお好みの料理をご注文ください。「揚げジャガイモ」は私のお勧めです』

男たちはまだ腹に余裕があるため、そのお勧め料理を頼んだ。芋を揚げただけの料理だと思っていたが、出てきた細切り揚げ芋を一口食べて全員が顔を見合わせる。外はカリツと芳ばしく揚がり、中はホクホクと芋の味がする。程よい塩味に我先にと手を伸ばす。何杯目かのエールを飲み干し、満足感に忘我となつた。

『いかがでしたか?』

男の声に、シャルミラは自分を取り戻した。いつの間にか、黒髪の男がテーブルの前に立っていた。レミの街でゴoremに荷車を牽かせていた男である。目は涼しく、口元に笑みが浮かんでいる。背をもたれさせだらしない格好をしていたシャルミラは、慌てて居住まいを正した。アウラが瞳をキラキラさせて男に返答する。

『凄かったです!こんな美味しい料理、生まれて初めて食べました!』

『有難うございます。明日の朝食もこちらで取っていただきます。ご入用でしたら、昼のお弁当をご用意いたしますが?』

全員がシャルミラを見る。何を期待しているかはすぐにわかった。

『お願いするよ。それと、ちよつと聞きたいことがあるんだけど、隣の「峠の宿」の主人……レイナさんが、この店も取り仕切つてるのかい?』

『お姉ちゃん？』

アウラが不思議そうに見つめてくる。何を聞こうとしているのか、疑問に思ったからだ。男は表情を替えずに、シャルミラの質問に答えた。

『彼女は宿の「支配人」です。当店は、私が営んでおります。大抵の行商隊は宿に泊まりますので、当店も潤っています』

『支配人：…でも、あんな美人が宿にいたら、色々と問題がおきるんじゃないか？護衛の男たちにチョツカイを出されたりとか：…それに、これだけ大きな宿と酒場を建てるなんて、かなりの資金が必要はずだ。一体誰が：…』

『さあ：…私はこの店を切り盛りするだけで精一杯ですので、そこまでは：…本日はご来店、有難うございました。失礼致します』

男は一礼して、テーブルから離れていった。その背をシャルミラはじつと見つめた。

『そう言われましても：…支配人は私なのですか？』

峠の宿の女支配人である絶世の美女、レイナは少し困った表情を浮かべた。男に口説かれてはいる訳ではない。支配人の部屋までシャルミラが押しかけ、この宿の「本当の主人」に会いたいと申し出たのだ。ちなみにレイナを口説こうとする行商人も護衛も「皆

無」らしい。以前、レイナに手を出そうとした行商人は、馬の世話をしていた獣人ゴンドに殴り飛ばされ、以来この山道への立ち入りを禁止されているそうだ。この山道の利便性を考えれば大損害である。

『アタイの眼は節穴じゃないよ。これでも女行商人として苦勞してきたんだ。レイナさんからはね。商いをやる人間が放つ「悲壮感」が無いんだよ。「使用人たちを路頭に迷わせないためなら、この身を売ってでも……」っていう覚悟が見えない。アンタは確かに支配人なんだろうけど、雇われだろ?』

『……………』

レイナは微笑みのまま、茶を啜った。陶製の茶器を受け皿に置くと嫺やかに質問を返す。

『ではシャルミラ様は、誰がこの宿の主人だとお考えなのですか?』

『解らない。アタイは女だからね。ただ、同性のアンタが雇われだつことは解る。アタイの予感だけど魔神亭の黒髪の男……あの人なんじゃないかって気がするね』

『仮にそうだったとして、シャルミラ様は宿の主人と会って、何を話すのですか? ご商売の話ですか?』

『……十年前、両親が死んで路頭に迷ったアタイと妹は、小さな行商を始めたんだ。幼馴染の友達も手伝ってくれて、少しずつ大きくなった。さらに商売を大きくしたいと思っ

て、タミル地方を出てエディカーヌ王国を屈指した。そんなとき、レミの街で女商人に出会った。アタイと同一年くらいなのに、大きな商売をしている雰囲気だったよ。その人に言われたんだ。何のために商売をしているのか。何のためにカネを得るのか。アタイは戸惑った。これまで、妹や仲間たちを食わせるだけで精一杯だったからね。その人に、この主人と話してみろって言われたんだ。アタイの生きる道、アタイの進む道を見定めたい。だから会いたいんだ』

生き方は人それぞれであり、本人が自分で決めるべきものだろう。それはシャルミラも解っていた。だが時に迷い、進む道が見えなくなるのが人間である。シャルミラはこれからを決めるための「きっかけ」を求めている。レイナは沈黙し、しばらくシャルミラを見つめた。そして：

『…だ、そうよ？ デイアン。シャルミラさんに、何か助言をしてあげたら？』  
部屋に隣接した扉が静かに開いた。黒髪の男がそこに立っていた。

魔神亭の二階は四部屋がある。行商人同士が話し合いをしたり、王国の重要な人物を接待するための「個室」が二部屋、店の売上金や仕入れ台帳などを管理する「事務室」、そして主人であるデイアン・ケヒトの部屋である。壁一面が書棚となっており、小さな

机の他に、ゆったりと座れる革張りの椅子が二脚、中央に置かれている。魔神亭、そして峠の宿の主人は料理と葡萄酒を持って部屋に入ってきた。

『お待たせしました。どうぞ、お掛けください』

『遅い時間に申し訳ありません。ケヒト殿』

『ディアンで構いませんよ。それに言葉遣いも改める必要はありません。友人に、一人称を「アタイ」と呼ぶ人がいました』

シャルミラは息を吐くと椅子に腰を下ろした。

『助かったわ。堅苦しい言葉遣いは苦手だね。接客はもつぱら、妹や護衛役に任せてるんだよ。アタイは仕入先との交渉役さ。普通に話させてもらう。だからアンタも普通に話してちょうだい』

『解った。で、オレと話をしろと言われたそうだな。まあ大して面白い話はできないと思うが…』

『そうかな。今日一日だけでも、アタイが得るものは多かつたよ。たとえば店を出していた「辛くて酸味のあるソース」、アレを瓶詰めしてアヴァール地方あたりまで持っていけば、かなり売れるんじゃないかい？ 麦酒を冷やす方法も気になるし、店にあった音を鳴らす妙な機械も知りたいね。アレは魔法道具？』

『いや、あれは「ゼマイパネ薇撥条」という技術を利用している。金属が戻ろうとする力を利用して



軸を回転させ、突起の付いた円盤を回転させる。円盤の突起が櫛状の金属板を弾いて音が鳴る。鋼鉄の焼入れ技術などはドワーフ族の十八番だからな。魔法道具よりも遥かに安上がりだし、長持ちもする』

『まあ要するに、売れる商品なんだろう？』

デイアンは苦笑した。オルゴール程度なら他国に売っても構わないだろうが、量産するのであれば工場が必要になるだろう。

『職人の手作業だから量産はできない。受注生産がせいぜいだろうな。次にレミに行ったら、ドワーフ族に聞いてみると良い。簡単なものなら作ってくれるだろう』

シャルミラは頷いて、教えてもらった職人の名前を懐から取り出した紙束に書いた。デイアンはその様子を見て、「あの女商人」がまだ人間だった頃を思い出していた。デイアンは話題を変えるように、シャルミラに質問した。

『それで： 先程、少し耳に入ったんだが「進む道」に迷っているそうだな？』

『リタって女商人に言われたんだ。「アンタはなんで商人やってるの？」ってね。アタイは妹と一緒に、生きるために行商人になった。それじゃダメなのかい？』

デイアンは何も言わず、葡萄酒を一口飲み、酔漬けにしたオリーブの実を口に入れた。しばらく沈黙してから、口を開いた。

『ダメというわけじゃないが、それでは長続きはしないな。シャルミラ、お前が好きな』

は「商売」か？それとも「カネ」か？」

『え？』

『行商人は様々な地方を巡って特産品を見出し、それを別のところまで運んで売る。「安く仕入れて高く売る」のが商売の基本だ。だがそれは、商売という仕事の流れを簡単に説明したものであつて、仕事の「価値」を説明したものではない』

『どういうこと？商売ってどういう仕事の価値？』

『そうだ。簡単に言えば「お客に喜んでもらう」ってことだ。商人は、その商品が必要としている人に売る。売ってもらつた人は、それで自分の「欲求」が満たされる、あるいは「不満」が解消されるので喜ぶ。お客を喜ばせた対価として、商人は利益を得る。カネが欲しいから「騙してでも売る」というのは商人ではない。ただの詐欺師だ。商人は、自分が売る商品がお客の為になる、と心底信じていなければならぬ。そして「客の喜びが自分の喜び」とならなければならない。さて、お前はこれからエディカーヌ王国の首都に向かうが、首都の人たちを喜ばせる商品は何だ？』

シャルミラはハツとした表情を浮かべた。懐から折りたたんだ布を取り出す。机の上で、丁寧にそれを広げた。

『エディカーヌ王国を喜ばせる商品、それはコレさ』

布の中は、何かの種であつた。

『アヴァアタール地方南部からニース地方は、ずっと人口希薄地帯で国ができなかった。それには理由があるんだよ。小麦が栽培できないからさ。この地方は暑いから、麦の栽培に不向きなんだよ。エディカーヌ王国だってきつと、麦栽培で苦勞しているはずさ。だからこの種を売るんだ。これはね。暑い地方でも実る穀物なんだよ！』

『ほう…』

ディアンは種を手にとった。小麦よりも小さく丸みがある。穫れる量次第だが、もしこの実が小麦の代用になるのなら、エディカーヌ王国にとっては画期的なことだろう。シャルミラはタミル地方南部の話をし始めた。

『アタイらはタミル地方のある村で生まれた。山賊に襲われて全滅しちゃったけど、それまではそれなりに豊かだったんだ。その理由がこの種さ。これを粉末にすれば麵麩<sup>パン</sup>だつて焼ける。しかも促成なんだ。作付けてから二ヶ月で収穫できるんだ』

（これは…ひよつとしたら「フォニオ」か？それにしても粒が少し大きい。ディールリ  
フィーナ世界独自の穀物だろうか？）

ディアンは丁寧に種を布に戻した。

『もしその話が事実なら、エディカーヌ王国は国を挙げて導入を図るだろう。まずは王

立研究所のイルビット族に研究させ、一定の耕作地を用意して試験的に作付ける。収穫物を様々に加工し、用途の可能性を探るだろうな。王都の人々、いやエディカーヌ王国全体を喜ばせる話だろう』

シャルミラは胸を張った。そして気づいた。いま自分は、確かに「喜び」を感じている。それはカネが儲かるからではなく、そこに必要としている人がいるという「読み」が当たったからだ。ディアンは頷いた。

『最初はそれで良いと思う。成功したら、お前は皆から感謝されるだろう。そして解るはずだ。商売の「本当の喜び」をな』

『必要としている人を喜ばせる、か…』

ディアンの話は、商売の原点である。だが、改めてそれを自分の中に位置づけたとき、モヤモヤとした迷いは消えていた。

朝食もまた、期待以上のものであった。麵麩と塩漬<sup>ペ</sup>け燻<sup>コ</sup>製肉<sup>ン</sup>、目玉焼き、野菜スープであるが、一つ一つが桁違いに美味しい。麵麩は外はサクツと香ばしく、中はシットリとして小麦の香りが口いっぱいに広がる。豚の三枚肉を岩塩と香辛料に漬<sup>ケ</sup>込み、それを燻製にした肉は、豚肉そのものの質が良いのか、旨味のある油を染み出している。カ

リツと焼かれた肉と半熟の目玉焼きを麵麩にのせて食べる。黄身の甘み、肉の塩味を麵麩が受け止める。獣骨を煮出してスープをつくり、そこに野菜を入れて塩と胡椒で味を整えたスープも麵麩の味を引き出している。十分な量を食べ、シャルミラ行商隊は宿を出た。ディアンとレイナが見送りをする。

『こちらがお弁当です。お昼時に召し上がってください』

ディアンから、木の皮で出来た箱を渡される。麵麩の香りがするが、それ以外に食欲をそそる未知の香りがした。

『「カツサンド」という料理です。豆から作った「赤味噌」に砂糖、黄酒を合わせ、獣骨のスープで溶いて少し煮詰めたタレに、豚肉に衣をつけて揚げた「カツ」を浸します。それを千切りにした葉野菜とともに、麵麩で挟みました』

男どもが後ろで涎を吸る。十分に食事をしたはずなのに、すでに空腹感を覚えた。ここにいたら、また一泊してしまうかもしれない。シャルミラは出立を急がせた。

『ディアン。アンタに会えて良かったよ。王都で店を出したら、ぜひ遊びに来てちょうだい』

『ああ、頑張つてな』

互いに握手をする。シャルミラは思い出したように、ディアンに最後の質問をした。

『そういえば、リタつて商人はディアンのことをよく知っているようだったけど、有名な

人なの？』

『：リタは名乗らなかつたようだな。まあシャルミラなら、教えても良いだろう。ただ、本人はあまり知られたくないそうだから内緒にしてくれよ』

首を傾げながらも頷くシャルミラの耳元で、デイアンは小さな声で教えた。

『彼女の名前は「リタ・ラギール」、ラギール商会の会頭だ』

目を剥いて驚くシャルミラに、デイアンは笑みを浮かべながら頷いた。